大分合同新聞
ワークシート

年　　組　　氏名

大分合同新聞 2023年2月10日（金）朝刊 1面

芽吹く 咲く 実る
第54回 大分県農業賞
～4～

生産・銘柄産地・6次化部門最優秀賞

県農協豊後大野甘藷部会（豊後大野市）

「甘太くん」一大産地に

甘みとしっとりした食感で人気の高糖度サツマイモ「甘太くん」。大分県農協豊後大野甘藷部会（豊後大野市、佐藤勇夫部会長）では2005年に試験栽培を始め、臼杵市野津町と並ぶ産地となった。部会には現在66戸が所属しており、作付面積は72・8ヘクタール。販売額は21年産（21年11月～22年4月出荷）で初めて5億円を突破して右肩上がりだ。

試験栽培段階から携わる佐藤部会長（81）＝豊後大野市三重町宮野＝は「ほくほく系の焼き芋が主流の中、しっとり系の甘太くんが市場に受け入れられるか不安だった。女性の強い支持を得られた」と振り返る。

阿蘇山の火山灰土が広がる市内は昔からサツマイモの産地だったが、販売額は伸び悩んでいた。救世主となったのが甘太くん。11年に日本たばこ産業（JT）が市内にも多かった葉タバコ農家の廃作募集をしたことを契機に、栽培面積は急拡大した。

甘太くんとして市場に出すには「べにはるか」を40日以上貯蔵する必要がある。12年からは農協のコメ倉庫を共同貯蔵庫に改修するなどして生産者の規模拡大に対応する。15年からは全部会員が病害虫に強いウイルスフリー苗を利用。種芋を使わないため、他県で流行するサツマイモの伝染病「基腐病」の感染を防ぐ。

会員66戸のうち50戸が60代以上となっており、高齢化が課題となっている。期待するのが市内の新規就農者向けの技術習得研修施設「インキュベーションファーム」の卒業生。施設では夏秋ピーマンとの複合品目として甘太くんの生産を推奨しており、新たな戦力として加わり始めた。

部会全体の技術力向上を目指した講習会も定期開催する。佐藤部会長は「産地を維持できるよう、甘太くんブランドをさらに高める。そのためには安定した出荷量と品質維持が欠かせない」と話した。

（佐藤章史）

高糖度サツマイモ「甘太くん」をPRする県農協豊後大野甘藷部会の佐藤勇夫部会長（右から2人目）ら役員＝豊後大野市三重町、撮影・首藤洋平

経営のポイント

- 甘太くんブランドで販売額増加
- 葉タバコ廃作を契機に面積拡大
- ウイルスフリー苗で病害虫予防

〔問①〕「甘太くん」の名称の由来を考えて調べてみよう

※調べ学習〔解答例〕
・スイーツのような甘さが魅力だから
・40日以上貯蔵して甘みを増したさつまいもだから

〔問②〕ネーミングの権利や、商標権を登録するための手続きを調べよう

※調べ学習
（参考）特許庁HP「商標出願のいろは」など

〔問③〕21年産は初めて販売額が5億円を突破して右肩上がりとあるが、その上で、今後の課題にはどんなものがあるだろうか

〔解答例〕
会員の高齢化、新規就農者向けの技術習得研修や技術力向上 など

〔問⑤〕大分県のブランド品にはどんなものがあるだろうか

※調べ学習　　（参考）ホームページ：大分県「The・おおいた」ブランド など

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。